

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University merge to Osaka Metropolitan University

Title	(第4章)大阪生野コリアタウンとソウル ガリボン洞：二つのエスニックコミュニティの過去といま
Author	孫 ミギョン
Citation	URP「先端的都市研究」シリーズ. 4巻, p.41-56.
Published	2015-03-30
ISBN	
Type	Book Part
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学都市研究プラザ
Description	都市大阪の磁場：変貌するまちの今を読み解く
DOI	

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

第4章 大阪生野コリアタウンとソウルガリボン洞 —二つのエスニックコミュニティの過去といま—

孫 ミギョン

はじめに

家から学校へ、職場へ、あるいは不慣れな外国へ、人間の暮らしに移動は欠かせないものである。このような個人の“移動”が集合的かつ長期的に維持されるなら、ここでは“移動する人びと”を広く“移民”という用語で表現したい。“移民”は国家や時代、個々人のそれぞれが置かれた状況により多様なかたちで発生する。韓国の場合、韓民族の移住史は1965年を境に旧移民と新移民に区分される。移住が自律的に行われる新移民に対し、旧移民は非自発的・半強制的な要因を背景に行われがちであった。とくに旧移民は朝鮮半島と隣接する日本・中国・中央アジアなど北東アジア地域中心に移住し、各地に定住した彼らをそれぞれ在日コリアン¹・朝鮮族・高麗人〔コリョイン〕と称する。

本章では、大阪市生野区のコリアタウンとソウルガリボン洞について“移民”のまちの実相に迫りたい。それぞれのまちの物理的・社会的空間は在日コリアンと朝鮮族の移動あるいは逆移動によって形成された。そこで、形成時期や空間の構成員は違うが、韓国の歴史を投影する日本と韓国に形成されたこの二つの空間をみれば、いくつかの新しい発見が期待できる。まず、この人たちの移動は韓国の激動の近現代史のなかで生まれた“歴史の産物”であり、また彼らの集住する空間を取り巻く状況や問題などには通時代的な共通点が発見できる。以下では、韓国の近現代史のなかで植民地時代・冷戦時代（朝鮮戦争・南北対立）、1965年日韓国交正常化・1988年ソウルオリンピックなどの時代のトピックスに照準を合わせながら生野コリアタウンやガリボン洞をみてみたい。

¹ 本章では、植民地時代に日本へ移住した朝鮮人である在日朝鮮人と、韓国政府樹立以降に移住した韓国人をふくむ在日コリアンを使い分けている。

4-1. 生野コリアタウンの形成と変容

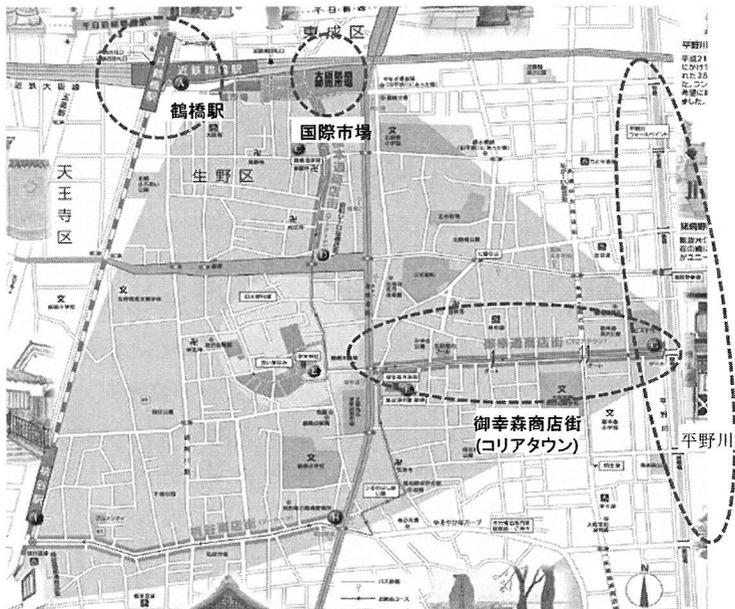


図4-1 生野周辺の地図

朝鮮人集住地区の形成

大阪市生野区には1973年に住居表示制度が導入されるまで猪飼野という町名が残されていた。古代に百済からの渡来人が多く住み、朝廷に献上する豚（＝猪）を飼育していたのがその名の由来である。奇しくも猪飼野は近現代史を通じて在日コリアン集住地区となっていく。猪飼野は明治時代に拓けた下町であり、中小企業や零細企業など町工場が多い地域だった。近くに大阪砲兵工廠という日本一大きな国営軍需工場があり、これに関連する下請工場が周辺にたくさん存在した。猪飼野でも下請工場で働く多くの労働者が必要になり、九州・沖縄をはじめとする西日本からの移民はもちろん、朝鮮半島からも朝鮮人労働者が集まりはじめた²。

² 水内俊雄・加藤政洋・大城直樹『モダン都市の系譜 - 地図から読み解く社会と空間』ナカニシヤ出版、2010年、135頁。

朝鮮人の日本への渡航は1910年から本格化したのが、大阪猪飼野への移動が本格的になったのは、1923年に大阪と濟州島の間に“君が代丸”の定期運航が開設されたのが契機だった。猪飼野に集まった朝鮮人は、町工場や平野川の開削工事などに従事しながら大正末期から猪飼野に定住するようになり、この地域に朝鮮人集住地区が形成された。

朝鮮市場の登場

食生活は、幼いころから身に染みついたもっとも保守性を帯びるものである。日本と朝鮮の食生活は大枠では共通点が多い。しかし詳細にみるとかなりの違いがある。大きな違いは、日本人と朝鮮人は食べる魚の種類が違うし、料理の味付けが違う。魚の煮つけ一つとってみても日本は醤油と砂糖だが、朝鮮はニンニク・醤油・唐辛子で煮つけるなど刺激物を大量に摂り、鶏や豚などの肉類を日本人に比べて多く食べる。そのため滞在が長期化すると朝鮮での食生活が恋しくなる。そこで懐かしい故郷の味が提供できる朝鮮の食材を扱う店が徐々に増え、朝鮮市場³が誕生したのである。こういった店も最初は道端に商品を広げて売る露天だったが、やがて市場という名で呼ばれるほどの賑わいをみせることになる⁴。1933年に発刊された『朝日クラブ』には朝鮮市場の様子がつぎのように記述されている。

朝鮮人の滞在数の一番多い大阪、わけても「朝鮮」そのものと云ひたい猪飼野の朝鮮市場は、大阪在住十三万三千人の朝人達の支持を受けて半町たらずの処に五十軒近い店が目白押しに並んでいる。牛の臓腑、豚の頭、ふか等と食物界のグロが軒並に顔をつらねて四五軒の日本人の店以外は売る人も買う人も鮮人ばかりです。(中略)
二萬人近く集っている地元の連中ではもとより、神戸、京都方面の鮮人たちにも有名で、二年ほど前、一人二人の人たちが他の場所ではちょっと手に入らない彼等の愛好常食物を並べだしたのがもとで今では毎日一萬人近い人が買い出しに来る繁盛ぶりである⁵

3 朝鮮市場の風景は、金賛汀『異邦人は君ヶ代丸に乗って—朝鮮人街猪飼野の形成史』岩波新書、1985年、に詳しい。

4 고정자・손미경「한글문화발전지로서의 오사카 이쿠노 코리아타운 (韓国文化発信地としての大阪生野コリアタウン)」『글로벌문화콘텐츠 (グローバル文化コンテンツ)』5号、2010年。

5 朝日新聞社『アサヒグラフ』通常 522号、昭和8年。



写真4-1 昭和8年の大阪朝鮮市場の様子

(出所：朝日新聞社『アサヒグラフ』通常522号，昭和8年11月8日)

1939年は約200カ所の生活必需品の店があり，乾き明太・唐辛子はもちろん婚礼品まで販売していた⁶。正月や旧盆の名節が近づくと買い物客で溢れんばかりの賑わいとなり，戦後の1970年代までは平日でも客が多かった⁷

一つの空間・二つの祖国——目に見えない北緯38度線

1945年に解放を迎えた朝鮮は，国をつくり上げるために多くの人びとが動きだしていた。しかし，朝鮮半島に残っている日本軍を武装解除させるという名目で北緯38度線⁸の北はソ連軍が，南はアメリカ軍が駐留するようになった。このようななかで同年12月，モスクワ三国外相会議でアメリカ，ソ連，イギリス，中国による5年間の信託統治が決定された。最初は，全国で信託反対運動が大々的に行われたが，共産主義者は信託賛成に変わり，韓国国内は反対派と賛成派に二分された。1948年2月に国連小総会で「可能な地域における選挙」実施が可決され同年5月10日南側^{イヌマン}での単独選挙が実施され，李承晩政権が誕生した。北側では9月9日に^{キムイルソン}金日成を首相とする朝鮮民主主義人民共和国が樹立され，朝鮮半島に二つの国家が存在するようになった。

一方日本国内では，日本に残った在日朝鮮人の支持をうけ，1945年10月15日在日朝鮮人連盟が（以下，朝連）結成された。しかし，朝連の指導部に不満を抱え「反共産主義」の立場を鮮明にした人たちにより，翌年10月在日朝鮮居留

⁶ 杉原達『越境する民—近代大阪の朝鮮人史研究—』新幹社，1998年，167頁。

⁷ 前掲注4)。

⁸ 38度線をめぐる問題については，玄光洙『民族の視点——在日韓国人の生き方・考え方』同時代社，1983年，に詳しい。

民団（以下、民団）が結成された。このようなそれぞれ立場を異にする組織の誕生で在日社会も二つに分かれ、生野の空間も北を支持する人と南を支持する人に分けられ、まるで朝鮮半島と同じく二つに分断されてしまった。

写真4-2は、1965年日韓国交正常化以後に現在のコリアタウンである朝鮮市場にかけられた横断幕である。左の韓国民団側の横断幕では、「期限がすぎて後悔しないよう永住権をはやく申請しよう」と書いてある。これに対して右の朝鮮総連（朝連が後に朝鮮総連に改組）は、「死の申請<永住権>を取り消し傀儡<韓国籍>を朝鮮へなおそう」と書いてある⁹。ここ生野では、母国の政治状況がそのまま投影され、在日の生活のなかにもその影響が出ている。筆者がいままでに会った何人かの人々は南北対立がいかに在日社会へ影響をもたらしていたのかをチェサ〔法事〕のときを例えて語ってくれた。

僕はチェサ¹⁰がとても好きでした。チェサのときは食べ物が多いし、親戚に久しぶり会えるし。でも、最後はいつも大喧嘩で終わりますけど。（在日三世のK氏）

最初は楽しく話をするんですよ。どんどんお酒が入ると北や南やで喧嘩をするわけ。子どものとき、本当に嫌でしたね。（在日二世のM氏）



写真4-2 民団（左）・総連（右）の横断幕

（出所：曹智鉉ほか『猪飼野一追憶の1960年代』新幹社、2003年、50-51頁。

⁹ 曹智鉉ほか『猪飼野一追憶の1960年代』新幹社、2003年、186頁。

¹⁰ チェサに供える食べ物は質量ともに非常に豊富である。そしてチェサは四代前もしくは五代前の先祖まで祀るため、伝統にのっとりチェサを挙行する家庭では年間十数回行うことになり、かなりの労働を費やさねばならない。藤田綾子『大阪「鶴橋」物語—ごった煮商店街の戦後史—』現代書館、2006年、162頁。

このイデオロギー対立は、家族や親戚、日頃の近所づきあいにまで影響をもたらしたという。しかしこのような状況も、在日コリアンの世代交代や南北情勢の変化などで、みえない北緯38度線の重みは軽減されていくようにみえる。

ともに生きるまちをめざして

朝鮮市場は1970年代まで賑わいをみせたが、1980年代になってから急速に客が離れ閑暇となった。理由の一つ目は、JR鶴橋駅周辺の国際市場¹¹に客が集まり、駅から少し離れている朝鮮市場まで客がこなくなったこと。二つ目は、在日コリアンの世代が一世から二世、三世へと交代することによって、祭祀や名節が簡素化されたり取りやめられたりする傾向が強まり、顧客が減ってしまったことである。三つ目は、1960年代に韓国で政権に就いた朴正熙^{パクチョンヒ}大統領の儀礼簡素化政策¹²との関係である。これについて在日二世の高正子は、「済州島でもそれまで行われていた5月の端午の名節が1970年代には、ほとんど行われなくなっていた。そのため、国交正常化にともない韓国との往来が頻繁になると、済州島でも行われていないという理由で（猪飼野でも）端午の名節がなくなった。隣人が参加するなど賑わっていた祭祀も在日間の理念対立が深刻になるなかで、ごく近親の親族だけが集まるようになる。祭祀や名節の簡素化は、そのまま「朝鮮市場」の売り上げと直結することになっていった」という¹³。朝鮮市場の衰退には、日本社会や在日社会の変化など多様な内部原因があると考えられるが、韓国で行われた「家庭儀礼準則」による儀式の簡素化政策や日韓国交正常化による在日コリアンの本国との往来など外部要因もあると考えられる。

これまで在日コリアンを相手に商売してきた朝鮮市場は同胞の客が減っていく、また1980年代以降に大型スーパーの進出などによって日本各地の商店街が衰退しているなか、その影響は朝鮮市場にもあらわれた。こうした状況のなか

¹¹ 戦後の闇市から発展した大規模な市場であり、生野コリアタウン同様に韓国の食材・衣装などを扱う店が多い。

¹² 1973年、朴正熙大統領は、家庭儀礼の儀式を簡素化・合理化をすることにより無駄遣いを抑制し健全な社会風潮を高揚するため、1969年3月「家庭儀礼準則」専門71条と附則を制定、大統領公示に確定・公布した。最初は、勧告レベルだったが、あまり成果がなかったため処罰規定を強化し「新家庭儀礼準則」を1973年1月公布した。この法律と準則は、1999年「健全な家庭儀礼の定着及び支援に関する法律」と「健全家庭儀礼準則」に変わった。(国家記録院：<http://archives.go.kr/next/search/listSubjectDescription.do?id=005836&pageFlag=>)

¹³ 前掲注4)。

で1988年、韓国でソウルでオリンピックが開催され、それまでネガティブであった韓国やコリアタウンのイメージをポジティブに転換する契機になった。また、ソウルオリンピックは「コリアタウン構想」¹⁴を牽引していき、1991年に道路のカラー舗装に対する補助金をだすという大阪市の政策によりついに具体化され、1995年に朝鮮市場の道筋に朝鮮文化を強調した門などを構えて「コリアタウン」をつくることになった。

2002年FIFA日韓ワールドカップや2004年からはじまるいわゆる「韓流」ブームを支える役割を担い、韓国文化の情報発信地として存在している。いまでは、生野コリアタウンを「くまちの学校」として日本の小・中・高校生を対象に異文化理解や体験の場として使われ、在日コリアン集住地区から日本人とともに生きるまちをめざして変貌している。

構成員からみえてくるもの：いまだに在日コリアン集住地区として存在する理由

かつて日本には全土に戦前からの朝鮮人集住地区が存在していたが、現在ではそのほとんどは跡形もなくなった。筆者はいままでオールドカマー¹⁵が集住している東京上野界隈をはじめ川崎市桜田商店街やセメントロード、神戸市長田区、大阪市西成区などをみてきたが、生野とは比べ物にならない。なぜ生野はいまだに在日集住地区として残っているのか。筆者の疑問は膨らんだ。ところが最近、その疑問を解く手がかりが生野と済州島の関係性や、済州島が置かれた残酷な韓国近現代史とのかかわりにあるのではないかと思うようになった。

済州島は台風などによる自然災害が頻発する地域であり、またやせ地であるため農業には適していない。そのため済州島民は貧しさと飢餓に苦しめられて

14 1984年に民団系の韓国大阪青年会議所と日本青年会議所が御幸森通商店街に対し、まちの活性化をめざして「コリアタウン構想」を提案したという。ここでいう「生野コリアタウン」の正式名称は「御幸森商店街」であり、西・中央・東の三つの商店会からなる。高賛侑『コリアタウンに生きる——洪呂杓ライフヒストリー』エンタイトル出版、2007年、377頁、上田正昭・猪飼野の歴史と文化を考える会『ニッポン猪飼野ものがたり』批評社、2011年、にも詳しい。

15 オールドカマーは日本の植民地時代に朝鮮から渡ってきた人びととその子孫を称するのに対して、ニューカマーは1989年の韓国の海外旅行自由化以降に日本に渡ってきた人びとを称する。

16 済州島人の大阪移民について、河明生は五つの要因を挙げている。第一に済州島の農業不振。第二に賃金および雇用機会が済州島よりも日本の方が相対的高かったこと。第三に済州島経済が自給自足経済から入超経済へと転換したこと。第四に同郷を紐帯とした済州島の「出稼制度」、第五に阪済航路である。在阪済州島人口は、1929年に島人口の18.2%にあたる35,322人、1934年には島人口の26.5%にあたる50,045人にのぼる。河明生『韓人日本移民社会経済史』明石書店、1997年、54-57頁。

きた。済州島民は貧しさから抜け出すため縁者や近親者を頼って君が代丸に乗って猪飼野へ渡って行った¹⁶。

ふたたび済州島人の渡航を触発したのは、1948年の4・3事件¹⁷である。この時期の渡航は、李承晩政権による済州島の政治的排斥が大きく働いていたからである。冷戦時代の米ソ対立という国際情勢のなか、李承晩政権は、徹底的に反共政策と反日政策を展開していた。そのため、共産主義を標榜する南労党によって引き起こされた同事件は、李承晩政権においては大韓民国の正統性を脅かすものであった。済州島は李承晩政権により徹底的に排斥され、しかも同事件で犠牲になった人びとを“パルゲンイ [共産主義者]”に彩色した。また、その遺族やマウル¹⁸全体が連座罪に追及されたため就職もできなくなった。「赤の島」という烙印は半世紀にいたるまで続き、そのため貧困が日常化していた。

4・3事件や1950年に勃発した朝鮮戦争から逃げるため、また貧しい生活から抜け出すため1970年代まで密航が後を絶たなかった。その背景には、日韓間の地理的な近さや朝鮮戦争前後の韓国における政治的・経済的混乱がある。同時に、日本による朝鮮の植民地支配の歴史およびその過程で生み出された在日朝鮮人という社会集団の存在も密航に大きくかかわっている。この点は法務省入国管理局が、密航目的について「昭和30年代までは戦前我が国に居住していた者が家族ぐるみで再渡航するケース、親子兄弟ら離散家族の呼び寄せ、あるいは親を頼って入国するケースなど人道上配慮を要する事案が大半を占めていた」とのべている¹⁹。生野で調査やインタビューをするとこのような話はしばしば聞く。つぎは在日二世（70代）の証言である。

“私は「4・3 사건 넘어간 후에 왔어요 4・3事件の以後に来ました」。4・3事件で済州島の社会が騒がしくなり外家 [母方の実家のこと] の祖父・祖母たちがオモニ [母] がいる日本へ行かせました。密航のルートは釜山からテマド [対馬] に来るルートで、釜山にはイモ [母方のおば] がいたので、まず、済州島から釜山に出てきて、そこで密航船に乗って、対馬へ向かったのだが、事故を起こし対馬で「密航者だ」と

¹⁷ 4・3事件とは、1947年3月1日に始まり翌年4月3日起きた騒擾および1954年9月21日まで済州島で続いた武力衝突と鎮圧過程で多くの住民が犠牲となった事件をいう。

¹⁸ マウルは韓国語で町（まち）・村の意味。

¹⁹ 外村大『在日朝鮮人社会の歴史学的研究——形成・構造・変容』 緑蔭書房、2004年、370-371頁。

言って助けてほしいと日本の海上警備隊に頼んだので、日本の警備隊から釜山の警備隊に連絡して、釜山へ逆戻りして帰り、その後釜山から済州島へ戻った。しかし、密航をあきらめたのではなく再び日本への密航を試みて成功した。二度目の密航の試みは、釜山から同じ船に乗って、対馬に向かった。今度は無事に対馬に着いて、倉庫みたいなのところにいると、そこから親戚に連絡し、迎えに来た親族が連れてくれる”。(強調は筆者による)

1965年を境に不法入国者はかなり減っていくが、1989年海外旅行自由化になるまで済州島から生野への流入は継続的に行われた。生野の在日社会には植民地時代から居住していた人から、4・3事件・朝鮮戦争以降の密航による渡航者、海外旅行自由化や最近の「韓流」ブームなどをきっかけに流入した人びとまで、見た目に区別できないがそれぞれ異なる時期に渡ってきた多様な一世たちにより構成されている。このような理由で生野にはさまざまな背景をもつ多層的な一世が複雑に絡みながら存在している。在日済州島出身者の研究者である高正子は「済州島から絶え間なく一世が流入することによって、コリアタウンは維持されている」という。

すなわち、他の在日コリアンの集住地区とは違い、一世の世代がいつの時代にも入れ替わり立ち代り存在し続け、済州島とのネットワークを頼って常に新しい移民が流入してくるので人的資源としても好循環のシステムを備えている。これらの要因こそが、生野コリアタウンが在日コリアン集住地区として長い生命力を保っている理由であると考えられる。

つぎに韓国における朝鮮族移民のまちについて紹介することで、生野コリアタウンで発見した済州島“移民”と在日コリアン集住地区との関係性をより深く考察したい。

4-2. ソウルにおける外国人集住地区とガリボン洞

ソウルには伝統的な外国人集住地区と、1980年代半ば以来外国人労働者が少

²⁰ 外国人集住地区の形成過程の内容は、Park, Se-Hoon 「Ethnic Places in South Korea: Historical Development and Socio-spatial Transformation」『한국도시행정학회 도시행정학보 (韓国都市行政学会都市行政学報)』第23輯第1号, 2010年, を参照し整理した。

しずつ流入するようになってから形成された新しい外国人集住地区が存在している。ここではまず韓国の外国人集住地区の形成過程から整理する。

韓国における外国人集住地区の形成過程

韓国の外国人集住地区の形成過程は、時期により4期²⁰に分けられる。

まず、第1期は開港期から植民地期である。この時期には日本人と中国人を中心に集住地区が形成されたが、1945年韓国解放以降急激な社会変化のなかで瓦解し、いまではその跡をとどめなくなった。ただし、仁川インチョンと釜山プサンのチャイナタウンはいまでも華僑の集住地区として残存している。

第2期は解放から1960年代までの時期である。この時期には、解放と同時に入ってきた駐韓米軍により新しいコミュニティが形成されはじめた。駐韓米軍のおもな駐屯地はソウルの龍山ヨンサン・京畿道の議政府キョンギド・東豆川イジョンブ・把住トンドウチオン・平澤バジュなどである。このなかでも龍山とその周辺の龍山区梨泰院は、いまでも韓国の代表的な外国人集住地区として残存している。

第3期は1970年代から1980年代にわたる時期である。1960年代に入り多くの先進国との国交修交が締結され、この時期には韓国に進出した先進国の現地駐在員とその家族による安定したコミュニティが形成された。今日よく知られているソウル瑞草区瑞草洞ソチョク ソチョドンソレマウル²¹・龍山区漢南洞ヨンサンク ハンナムドンドイツマウル²²・龍山区東部二村洞トンブイチョンドン日本人マウル²³などは、この時期に自生的に形成された外国人集住地区である。

そして、第4期は1990年代以降外国人労働者による集住地区が形成された時期である。この時期の代表的な事例が安山市元谷洞アンサンシウォヌゴクドンである。ここは、半月国家産業団地と始華工業団地に隣接する地域で、1990年代半ば以降、産業団地で働く労働者が集まりはじめた。同様に移民労働者によって形成されたのが、ソウル九老区ガリボン洞である。1990年代後半からロシアや中央アジアの商人が東大門一帯チュンククアンヒドンに入出入りするようになってから、ソウル中区光熙洞はロシア及び中

²¹ 瑞草洞ソレマウルは、龍山区漢南洞にあったソウルフランス学校が1985年に盤浦四洞へ移ってきてから、自然に形成されたフランス人集住地区である。

²² 1960年代から駐韓外国公館がつぎつぎとできた韓南洞には、ドイツ人をはじめ外交官の家族がおもに居住している。

²³ 東部二村洞日本人マウルはそのなかでも最初に造成されたものであり、解放後本国に帰った日本人は、年日韓国交正常化直後から現地駐在員を中心にふたたび増加しはじめていた。

中央アジア村として急浮上している。最近ではモンゴル人が増え、特定の建物内でモンゴル食品や新聞などを購入できる商店がつぎつぎと入店して、いつしかその建物は“モンゴルタワー”と呼ばれるようになった。このように韓国の外国人集住地区は時期別にバラバラに形成されたものである。

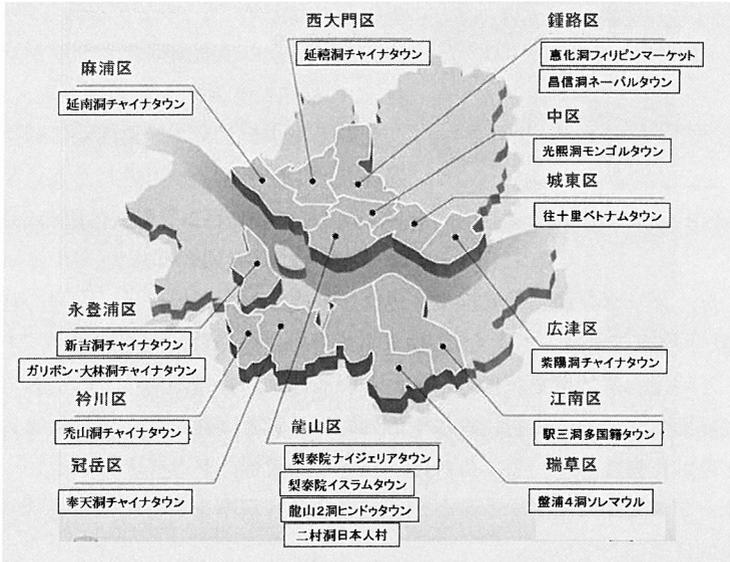


図4-2 ソウル市の主な外国人集住地区

(出典)『韓国経済』2011年4月10日号

ガリボン洞における空間の形成と変化

近代の永登浦²⁴は、ソウルと釜山・仁川を結ぶ京釜線と京仁線が交叉する鉄道交通の中心地であった。1930年代、日本の巨大紡績工場などが立地してからは工場地帯へと変貌したが、朝鮮戦争などでほとんど破壊されみる影もなくなった。しかし、1960年代韓国政府の経済開発5カ年計画に基づいて「韓国輸出産業工団（以下、九老工団）」が造成され、ふたたび活気を取り戻した。1970年代には軽工業中心の労働集約型産業により多くの労働力が集中し、工団

²⁴ 永登浦区は、1960年代と1970年代の工業化のなか急速な都市化が進むにつれて、効率的な行政サービスをはかるため1980年4月1日に九老区と分区された。



図4-3 九老・ガリボン地区

労働者の居住地としての役割も担っていた。しかし、1980年代後半から1990年代にかけて、先端産業への産業構造の転換、またソウル市の地価上昇により製造業の工場移転が本格化し、この地域は空洞化現象が起こりはじめた。ちょうど同じ時期に、1993年11月からは産業研修生制度が導入され、この地域にも外国人労働者が流入した。

九老工団がデジタル産業団地に転換する過程で、工団労働者が退去した九老区ガリボン洞の“チョッパン”²⁵形式住居の俗称“ボルチブ”²⁶に、中国朝鮮族が入れ替わりで

入居した。ガリボン洞に朝鮮族集住地区が形成された背景には、交通の利便性（地下鉄2号線, 7号線）とともに、独身労働者むけの特殊な住居形態の“チョッパン”と呼ばれる低価賃貸住宅が多いという地域的特徴があったのである。郊外の大規模産業団地の周辺に集住する外国労働者とは異なり、朝鮮族は大都市の中心地域に集住している。これは、朝鮮族の韓国語レベルが高いということからサービス産業に従事することが多いので、首都圏を中心に低価賃貸住宅が多い地域に集住している。

朝鮮族町へ

韓国社会に朝鮮族が流入するようになるのは、1992年韓中修交が最も大きな起点となった。2003年に就業管理制度・雇用許可制度、2007年に訪問就業制度の実施により、徐々に朝鮮族の人口は増えつつある²⁷。このなかでもとりわけ

²⁵ “チョッパン”とは、部屋をいくつかの小さなサイズに分けて1～2人用にした小部屋のことを称する。通常3m前後の小さい部屋で、入居するときの保証金はなく、1ヵ月ごとに家賃を払う。

²⁶ “ボルチブ”とは、もともと蜂の巣を称する。しかしここでいう“ボルチブ”は九老工団の工場で働いた韓国労働者“ゴンスンニ・ゴンドリ”（工場で働く女性や男性の蔑称）が居住した住宅のことで、まるで蜂の巣のように狭く複雑であったことからこのように呼ばれた。

²⁷ 2013年に韓国国内に滞在中の在外同胞は544,000人で、2003年の約4倍に増加した。

²⁸ 25歳以上の朝鮮族とCIS諸国の高麗人のなかで、韓国に血縁や親戚などによるつながりがある場合は無制限に、ない場合は韓国語能力試験に合格した者のなかから毎年法律に定められた定員の範囲内で入国を許可する制度である。この制度に基づいて発給されるビザ（H-2）は5年間有効であり、入国後最大3年までの滞在を認める。また、期間内に入出国の自由も保障される。

朝鮮族の移住に大きな影響を与えたのは、訪問就業制度である。この政策は在外同胞に対する優待政策²⁸の一つであり、韓国国内での朝鮮族の労働と長期滞在を可能にしたものである。長期滞在が可能になった朝鮮族はガリボン洞に定住するようになり、この一帯は朝鮮族最大の居住空間であり、彼らの生活に必要な食料品をはじめ中国語の歌が歌えるカラオケ、飲食店などさまざまなサービスを利用できる“朝鮮族の生活文化の中心地”に変化している。



図4-4 ガリボン洞の朝鮮族向け商店

この地域に朝鮮族を対象にした商店ができはじめたのは、朝鮮族流入人口が急増した2000年以降のことである。ガリボン洞と大林洞^{ディリンドン}一帯は、わずか5年間で多く見積もって100店にもおよぶ朝鮮族商店街が急速に形成され、短い期間に朝鮮族の代表的な生活空間として定着している²⁹。ガリボン洞では韓国内の多文化共生の空間として、2004年に在韓朝鮮族留学生と中国同胞タウンセンターが共同主催で“共生と和合”の文化祭りを開催した。また同年“共生と和合の街宣布式”、翌年には“ガリボン洞同胞祭り”を開催しながら、新しい文化空間・ビジネスマーケットとしての可能性を探るために努力している。

しかしこのガリボン洞は、先述のとおりソウル市のなかでも低賃賃住宅が集積した地区として有名で、生活環境がもっとも劣悪なところであった。また、

²⁹ 김현선 『한국체류 조선족의 밀집거주 지역과 정주의식-서울시 구로 영등포구를 중심으로 (韓国滞在朝鮮族の密集居住地域と定住意識-ソウル市グロンドンボグを中心に)』 『한국사회사학회 (韓国社会史学会)』 第87輯, 2010年, 244~246頁。

この地域に朝鮮族の集住地区が形成されてからは、物理的環境の劣悪さとともに社会的にもさらに孤立を深めている。しかし2003年指定された再開発地区計画が2014年に水の泡となり、ニュータウン地区計画は破棄された。



図4-5 デジタル団地とガリボン再整備促進地区

その後2014年9月16日ソウル市は、「ガリボン洞の歴史性を生かした都市再生を行う」と発表し、都市再生の方策として、ソウル市が“ポルチプチョン”の一部を買い入れ“ポルチプチョン体験ストリート”をつくるというアイデアを提示した。ガリボン洞の歴史性を生かし産業化時代の庶民の暮らしを空間記録として残す、また、工房や創作空間を若いアーティストに提供し、ガリボン地区だけの独創的風景を創るといふ。それに加えて多文化支援センターを設置、“韓国のなかの中国”と呼ばれるガリボン洞の特別な地域景観を現代的にアレンジし、新たなチャイナタウン造り構想もたてている。

二度目の移動—韓国への復帰

朝鮮族の起源は、19世紀半ば、朝鮮半島北部で貧しい生活を送っていた韓民族の一部が新しい耕作地を求め中国東北部の辺境地域に移住・定着したことにある。典型的な農村社会だった朝鮮族社会に大きな変化があらわれたのは、1970年代末から展開された中国政府の改革開放政策によるものだった。社会主義理念がよく反映されている東北三省では市場経済へ転換する過程で多くの国

有企業が倒産し、リストラにより多くの労働者が働く場を失ったのである。朝鮮族移動の段階は、①近隣の都市部への移動②東北三省外の北京、上海のような大都市あるいは沿岸部都市へ移動③外国への移動である。朝鮮族の国外への移動先でもっとも大きな割合を占めるのは、やはり韓国である³⁰。1980年代半ばから韓中の交流が活発になりはじめ、またソウルオリンピックなどで韓国の様子がメディアで知られるようになり、朝鮮族の韓国に対する認識が変わってきた。1980年代半ばから1990年初頭にかけて、韓国にいる親戚の訪問が盛んになり、1992年に韓中国交樹立を機会にコリアンドリームを夢見ていた朝鮮族の本格的な労働移住³¹がはじまった。

朝鮮族の移動の背景には、早期移住者と後続移住者、そして中国に残っている非移住者の間に韓国移住に関する多様な情報を交換する移住ネットワークが形成されている³²。このようなネットワークを利用してガリボン洞に定着するケースが増加している。また、彼らは他の外国人と比べて血縁関係に頼って移住する傾向が多分にある。最近では1990年代に移住していた移民一世が中国に残っていた子どもを招くことによって彼らの子どもが韓国に流入するようになり、親から子にわたる“世帯移住”が確認できる。とくに朝鮮族の韓国移住は、旧朝鮮から中国の辺境地域に、そしてふたたび韓国へ復帰する移住の流れをみせている。韓国の朝鮮族移民とは、越境的な移動労働者というだけにとどまらず、植民地期移住の経験を持ちながら、“親の祖国”に逆移住した韓民族の子孫という特殊性を同時に持つ集団であることから、他の外国人労働者集団とは異なる複雑さや二重性も持っている³³。すなわち、朝鮮族は韓国・中国という国家的境界だけではなく、“韓民族”という血統をもち、それにもかかわらず同胞として簡単に受け入れてもらえない冷戦の産物であるイデオロギーなどの複雑な関係網のなかに置かれているのである³⁴。

³⁰ 이장섭, 정소영 「재한조선족의 이주와 집거지 형성:서울시 가리봉동을 중심으로 (在韓朝鮮族の移住と集住地形成:ソウル市ガリボン洞を中心に)」 『전남대학교 세계한상문화연구원 (全南대학교世界韓商文化研究団)』 2013年, 16頁。

³¹ 韓国政府は、訪問就業 (H-2) ビザで入国した者が製造業や農・畜産業に1年以上従事した場合には在外同胞滞留資格 (F-4) ビザを付与する。F-4ビザをもつ者には韓国国民に相当する法的地位が保障される永住資格 (F-5) ビザが申請できる資格が与えられる。

³² 前掲注29), 16頁。

³³ 同右, 4頁。

³⁴ 문재원 「초국가적 상상력과 ‘엔벤거리’의 재현 (超国家的創造力と‘エンベン街’の再現)」 『한민족문화 (韓民族文化)』 47, 2013年, 399頁。

おわりに

韓民族移住の歴史は1世紀半になった。朝鮮半島以外の国や地域に生活する韓民族は、2013年に全世界181ヵ国、約700万人（韓国外交通商部資料）で、南北人口の10%を超える規模に膨らんだ。これは中国の華僑、ユダヤ人につぐ3番目にあたる規模である。これらの数字からもわかるように、韓民族が歴史過程において近現代のなかでかなり多く海外に移動したことがわかる。すなわち、在日コリアンと朝鮮族の移動は“激動の100年”ともいわれる韓国の近現代史から溢れ出た“歴史の産物”なのだ。韓国の歴史を縦軸に、中国東北三省・朝鮮半島（済州島）・大阪市生野という地域が横に連繋して、その影響をお互いに取り交わしていたとみられる。

移住や集住地区形成のプロセスとして、①個人的な事情で移動するが②滞在期間が長くなるにつれて家族・親戚が集まり、また出身国家別・地域別ネットワークが形成される。さらに③コミュニティ中心の組織・商圈などが登場する。このように自発的に形成されたネットワークを通じて連鎖移住が生じる。④永続的な居住地として発展しながらホスト社会の政策と条件に応じて市民権を獲得するか、あるいは政治的排斥により永久的にマイノリティとして残る³⁵。このプロセスを通じてみると、現在のガリボン洞は②と③が混在している段階で、生野は朝鮮市場を起源にする商圈や朝鮮総連・民団などの組織をもつ③と④が混雑しているように考えられる。ところが、生野コリアタウンとガリボン洞では、その場所のもつ歴史的背景や生活実態にはかなりの相違がある³⁶。それにもかかわらず、ソウルガリボン洞からも、1世紀という分厚い歴史をもつ生野コリアタウンと同じく“多文化共生の空間”がテーマになっていることや、縁者・親戚を頼って移住することなど、共通性も垣間みえ興味深いところである。多文化社会に入り、外国人の移住や定着によってあらわれるさまざまな問題や変化にどのように取り組んでいくのかは、大都市が抱える大きな政策課題である。その意味からみれば、在日コリアンと日本人社会がうまくつくり上げてきた大阪生野コリアタウンにはその答えがあるに違いない。

³⁵ 前掲注20)、72頁。

³⁶ 藤原書店編集部 『歴史の中の「在日」』 藤原書店、2005年、303頁。